

オルガノン要約 § 253～263

§ 253 悪化や改善の徴候は、患者の感情の状態や態度に最もよく表現される。

A) 改善が始まれば、だんだん心地よくなり、落ち着き、気持ちが開放され元気になる。

B) 悪化はその反対。

(注) レメディが正しくても投与量 (Dose) が多すぎる時は患者の感情を乱すので、A のような徴候をすぐには気づくことはない。(§ 276 参照)

§ 254 患者の中には悪化や改善を報告できないもしくは報告しない者もあるが、鋭く観察する医師には、悪化したのか改善したのかは明白である。

§ 255 そのような患者とは、病状のノートと一緒に検討することで、回復したのか悪化したのかを確信することができるだろう。

感情と精神の回復が見られるなら、レメディによって病気は後退していくだろう。

§ 256 新たに様々な症状が出た時、あるいは重い症状が生じた場合、レメディが不適切なため悪化していると見なすべきである。見た目の様子でも明らかであろう。

§ 257 「お気に入り」のレメディを作ってはいけない。どのレメディも有用である。

§ 258 「苦手な」レメディも作ってはいけない。

重要なのは、その症例において特徴的な症状の全体像に最もよく対応しているレメディを見つけることだけであり、その際にささいな心の動揺（苦手意識などの偏見）などにより、レメディの選択に影響を及ぼしてはいけない。

§ 259 治療中は、医薬的な作用のある食事法・養生法に基く生活によってレメディの働きをかき乱さないように注意せよ。レメディの働きは微妙・精妙だから。

§ 260 特に慢性病においては、治療を妨げる持続的要因を取り除くことが重要である。

(注) それらの例を多数列挙。しかしどうしてもよいものまで制限すると養生を困難にする。体に合わない健康食品、不適切な運動、心身の酷使、湿った部屋など。

§ 261 慢性病の場合、回復を妨げるものは遠ざけ、益のあるものを補うこと。

§ 262 急性病の場合は、本人が必要としているものを欲することが多い。それを妨害しないこと。

§ 263 急性病の時に欲しがるものは、一時的に緩和するものばかりだが、それで患者の欲求を満たすことは、全体として重要でもある。その後レメディを与えれば良いだけである。